

# 工業高等専門学校における英語ディベート活動の抵抗感を軽減する指導方法と教材に関する実践的研究

朝美, 淑子

<https://hdl.handle.net/2324/6787693>

---

出版情報 : Kyushu University, 2022, 博士 (学術), 課程博士  
バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)



氏 名 : 朝美淑子

論文名 : 工業高等専門学校における英語ディベート活動の抵抗感を軽減する  
指導方法と教材に関する実践的研究

区 分 : 甲

## 論文内容の要旨

本論文の目的は、「ディベート活動に対する抵抗感を軽減するために有効な教材・指導法はどのようなものか」という問いに対し、独自に開発した教材を用い、その効果について実践的な授業を通して検証することである。

本論文は以下の構成になっている。第1章序論の後、第2章では、研究対象のディベートとエンゲストロームの拡張的学習の先行研究について概観する。第3章では、実践を行うための準備として、1年目の教材開発の経緯とデータ収集方法を述べ、その後実践の場である高等専門学校の概要について紹介する。第4章では、反駁活動に対する抵抗感を軽減する新たな教材を使用した1年目の実践の概要および結果について報告する。第5章では1年目に使用した教材の課題を解決するために改善した教材を使用した2年目の実践の概要および結果を報告する。第6章では、第5章で述べた教材で習得した知識・スキルが実際のディベートでの反駁活動に応用可能なものであるのかを、教材使用群と未使用群の2年目の英語ディベート大会の記録およびアンケート調査の結果から比較検証する。第7章では、これまでの内容を総括し、本論文から得られる教育的示唆および今後の課題について述べる。

本研究の研究課題は2点ある。第一に、英語ディベートにおける「反駁」活動に対する日本人学習者の抵抗感を改善する教材を開発することである。エンゲストロームの拡張的学習の発達のワーク・リサーチの方法論的なサイクルを用いて、防災ゲーム「クロスロード」(商願番号 2004-83439 (第28類))を基にした、新たな教材を教師が自ら指導・介入しながら、学習者とともに開発する。第二に、開発した教材の効果について、実際にディベートを実施することによって検証することである。実践においては、筆者の勤務校である工業高等専門学校の学生を対象にディベート大会を実施する。その際、授業を録画し学生と教師の発言等をすべて記録し、新しい教材を実験的に使用したクラスと、使用しないクラスの2群に分けてその発言内容の差に関する質的研究を行う。

英語ディベートの反駁活動の抵抗感を軽減する教材開発 (Dare To Be Different、以下 DTBD とする) に関して、本論文を通して記述・検証したことから得られる示唆は、次の2点にまとめることができる。

【示唆1】DTBDはそのゲーム性の高さから、自分の考えと異なる意見を述べることや反駁活動に関する抵抗感を軽減する効果がある。

本研究の結果、DTBDは自分の考えと異なる意見を述べたり、反駁を行うことに対する心理的抵抗感を軽減する教材であると考えられる。また、発言する人の抵抗感の軽減に有効だけでなく、他者の多様な意見を是認する態度の育成にも効果があることが確認されたため、クラスなどの集団としても自分の考えとは異なる意見を受け入れることに対する抵抗感を軽減することも明らかになった。このことは、学習者や教師が抱えるディベート指導の課題の解決方法の1つとして、日本の教育現場における英語ディベート指導の普及率向上に貢献する原動力になると思われる。

【示唆2】DTBDは、特別な指導なく、自主的に参加者が反駁を行うことを促進すると同時に、実際のディベートにおいても、反駁の回数および反駁内容の多様化が見られるという点で、英語ディベートの反駁練習教材として効果的である。

本研究におけるDTBD実施後の英語ディベート大会の結果、DTBD実施群はDTBD統制群よりも反駁の回数がやや多く、反駁のパターンの種類も多いことが明らかになった。DTBDを通して、YES/NOを決定する際に、問題における様々な状況を考慮し、他者が思いつかないような視点を探るという活動が、ディベートにおける反駁を促進している可能性があると考えられる。さらに、DTBDにおける協働学習によって、多様な観点からの意見を聞くことによって、反駁内容の深化が図られる可能性がある。このように、DTBDによって反駁活動の促進・深化を図ることができたというデータを示したことで、批判的思考力の育成を目指した英語ディベート活動のカリキュラムデザインの方策を示すことができたと思われる。

これらの示唆は、DTBDという教材を用いて実践授業を行い、参加者の発言を詳細に分析することによって得られた示唆であるため、本論文の独自性となると考えられる。一方、本研究で検証することができなかった今後の課題は次の2点である。

第一に、本研究においては、DTBDを実施した期間が90分1コマであったため、DTBDにおける一定の効果は見られたものの限定的であったという点である。そのため、自分の考えと異なる意見を述べることや反駁活動に対する抵抗感を払拭する時間が不足していたと考えられる。これは、DTBDでは抵抗感が軽減していたにもかかわらず、ディベートにおいては抵抗感の軽減に繋がらなかったという課題となった。また、DTBDでは、やや英語に対する抵抗感は軽減していたものの、DTBD活動およびディベート大会の両方において英語使用に対する抵抗感が課題として挙げられた。このような2点を解消するために、DTBDをディベート指導の一環としてカリキュラムデザインを行う際には、1年間を通した帯活動として実践することが望ましいのではないかとと思われる。短時間でも回数を重ねていくことによって、反駁活動に対する自信が増し、実際のディベートの反駁に対する抵抗感の軽減に波及する可能性がある。また、英語に対する抵抗感においても、帯活動で実施することによって、今回の自分の発言を振り返り、次回に向けてどのような英語表現を使用すべきか自分で考え、友人と意見交換を行う時間を持つことができる。このような時間的猶予を与えることで、英語で伝えることができたという自信をつけることができ、英語に対する抵抗感の軽減に繋がる可能性がある。さらに、DTBD実施前に、反駁で用いる定型表現や出題する問題に対する背景知識や基本的な英語語彙などを教示することも有効であるかもしれない。そのため、今後、上記のような長期的な実践検証を行い、DTBD自体の効果および英語ディベートへの波及効果を検証する必要があると思われる。